

中世末期に於ける國民文化の進展と佛教

藤原弘道

應仁文明の亂を動因とした戰國の世相は、盛衰興亡目まぐるしい變遷を遂げ、各方面に實力の尊重、個性の發揮、乃至は現世的色彩を展開した。自己の力に信賴する進取的意氣は現實を樂しむ心となつて、現世重視の聲は隨所に湧いた。國民各自の自覺は從來の貴族、僧侶、武士中心の文化以外に、民衆自らの生活、独自の文化を創造せんとして、其の趣味、其の嗜好に適する文學、藝術を産み出すことによつて、近世日本文化の黎明が告げられた。

さて佛教一たび我國に傳つて以來、その豊富なる教義と體驗とは國民生活の重要な文化的要素となつて國民文化を指導したことはない。而して鎌倉時代の新宗派の獨立運動を終へた室町時代の佛教は貴族、武士といふが如き上流社會の間に受容されたものでなく、民衆一般の間に普く浸潤した。又地理的にも奈良、京都等と固定した佛教ではなく、全國的に廣く傳播した。いふまでもなく、當代に於ける僧侶は文化の荷擔者であつたが、一は攻城野戰に寧日なき戰亂多い時代であり、一は一般民衆に親しく接した結果、博學有徳の僧の出現少く、たゞへ狂言の題材となつた凡僧愚僧まで行かずとも、概して聖なる文化價值を失つて、世俗化して行つたことは事實であらう。

抑々世俗の生活を離れた出家は須らく恩怨を超越すべき筈である。故に王朝以來出家は捨人といふ概念から敵味方の間を自由に交通するこゝを許されてゐた。眞實の僧でなく、たゞ僧服を身に纏ひ、頭を圓めたもの、或は修驗道の山伏姿に身を装したものと雖も陣中では特別の取扱を受けた。戰國時代に於ける陣僧、軍僧の活動がそれである。今昔物語第廿五卷、源頼義朝臣尉安部貞任等の物語の中に、陸奥の國司藤原登任の一族茂頼のこゝを述べて、

軍敗レテ後數日守ノ所在不知、既ニ敵ノ爲メニ被討ニケリト思テ、泣々我レ彼ノ骸骨ヲ求メテ葬セム。但シ軍ノ中ニハ僧ニ非ズバ難レ入ト云テ、忽ニ髮ヲ剃テ僧ト成テ軍ノ庭ヲ指テ行ク。道ニ守ニ値ヌレバ、且ハ喜ビ且ハ悲ム
テ守ト共ニ返ヌ。

こいふのはその間の事情を示すものである。

足利季世紀第四には、天文三年湯川民部少輔の子業阿彌といふ法師を陣僧として、回狀を書いて敵陣に送つたこゝが見えてゐる。戰國時代にはかくの如きこゝが屢々見られる。

弘治三年二月には毛利元就が豊後國大友氏へ使僧を派し、天正十年六月には、高松城主清水宗治が切腹するや、秀吉は大知坊こいふ陣僧を毛利の陣に遣はし、毛利家では安國寺惠瓊を陣僧としてゐる。彼等もかく平和の媒介者に見れば甚だ賀すべきであるが、中には軍の策動をなし、私利を計る似而非なる僧もあつた。それらにいたつては佛教を冒瀆するものこいはねばならぬ。

土佐の長會我部元親は、出家形儀の事を規定して、

一ニハ 不_レ遂_ニ上聞_ニ落墮於_レ仕者、忽可_レ行_ニ死罪、

一ニハ 不_レ叶_子細無_レ之者、夜中出行停止、

一ニハ 亂行之輩聞立於ニ申上ニ者一稜可ニ褒美ニ、

右條々於レ猥者、依ニ其輕重ニ可レ爲ニ流罪ニ事。^③

こいふ條目を出して、特に僧徒の夜中出行停止を規定してゐる如きは、僧徒の策動を禁じ、軍事に關する嫌疑を避けしめんがためであつた。

吾妻鏡卷五、文治元年十一月十七日丙申の條に、「伊豫守(源義經)者假ニ山臥之姿ニ遂電訖」ニあるのは、山伏姿で敵味方交通の安全を期するこゝが出来た様子が知られる。されば武田信玄も、「禰宜并山伏等之事不レ可レ頼ニ主人ニ、若背ニ此旨ニ者分國徘徊可レ爲ニ停止ニ事。」ニ山伏の害を重視してゐる。

註 ① 中國治亂記

② 川角太閤記

③ 長曾我部元親家法百ヶ條

④ 武田信玄 甲州法度

二

社寺は信仰の威力ニ廣大なる境内及び所領を有してゐるから、附近の豪族はその懐柔の爲め、更に進んで僧徒の力を利用せんが爲めに師檀關係を結んだものもあり、一族門葉を僧ニして、社寺に住せしめたこゝも戰國時代思潮の一現象である。

元龜二年、信長の比叡山焼打ちの如きも、一山僧徒修學の廢怠墮落の結果に基くこいはれるが、^①その直接原因は比叡

山の僧徒が淺井、朝倉二氏に味方した爲めであるこゝはいふまでもない。こゝに豪族の師檀關係は、その豪族の運命を共にしなければならぬ事實を知るのである。^②

かくて中世末期の佛教はその文化的價値に於て儒教の如き隆盛を見ずして、自らその威信を失墜せしめたのである。然しながら佛教行事としては民衆的な時代精神によく投合して人心を把握した。たゞ形式的に墮したことは言へ、一般民衆の信仰を繋ぎ止めてゐるものに廻國巡禮なるものがあり、それがまた國民文化の發展に資すべき處少くない。即ち巡禮の往來は間接には交通を發達せしめ、都鄙相互の文化普及に與つて頗る重大なる意義を有するものである。

抑々巡禮といふ思想は、勿論印度、支那から渡來したものであらうが、我國では平安朝から觀音信仰と結び付いて盛んな民衆的行事として發達した。

戰國時代は諸國兵戰の爲めに荒され、一見交通甚だ危険であつたやうに思はれるが、實際は巡禮の往來頗る頻繁に行はれた。天陰語錄に、

巡禮之人溢于村、盈于里、背後貼三尺布、書曰三十三所巡禮、中略、其源出花山上皇也。自寛和二年至今明應八年、已得五百餘箱、巡禮之人益熾也。

こゝいひ、然もこれらの巡禮に對して保護を加へたことは、同語錄に、

關吏義而不征之、舟師憐而不賃之、或推食食之、或推衣衣之。

こゝいひ、又蓮歌師宗長は大永五年十二月小田原に於て、下野守時茂に對し、

慈悲のかぎりこはいへぎ、巡禮するものを唐土には遊手の民にて許容せずこなん、あるは佛事作善のついでなきには有べし、必ずすこするこにはあらずかし。^③

ミ、その保護に過ぎることを諫めてゐる。

曾て雜誌「伊豫史談」第五十四號に報告された國幣中社土佐神社内陣の樂書に、

四國遍路の身共只一人、城州の佳人藤原富光是也

元龜三年二月廿七日書也

あらく御はりやなふく何共やぎなくて此宮にこまり申候

かきをくもかたみこなれや筆の跡我はいづくの土こなるこも

これによるミ、四國八十八ヶ所巡禮のこの遍路に宿のかしてがなく、この神社に宿泊したものと見える。更に又、

備中國、月光寺、玉藏寺、松本坊、同行七人

元龜二年六月五日 金松

高蓮法師、光勝禪門、道慶禪門、六郎兵衛、四郎二郎、忠四郎、藤次郎、妙才、妙勝、泰教法師、爲六親眷屬也、

南無阿彌陀佛

以上の如き樂書は巡禮者の有様を知る面白い資料の一つである。その他京都三十三所巡禮、江戸三十三所巡禮、江戸八十八所遍禮、十二薬師詣、六地藏詣等は日次紀事及東都歳事記等の年中行事に見え。百日詣、千日詣、月詣、千度詣等に至つては、必ずしも此時代に始つたものではなく、又後の時代に始るものもあるが、頗る盛に行はれたことを知るこゝが出来来る。

この外當代に於ける佛教の民衆的な儀禮ミして大念佛、念佛踊、六齋等が盛に行はれたが、それらに至つては、深刻な宗教的意識の目覺めではなく、よし宗教的背景を多分に持つてゐたにせよ、それは將に目覺んミする當時の人々の享

樂的意識を満さんとする一手段として、遊戯的分子の多分に含まれてゐることは否定することが出来ない。享祿二年三月十三日の嵯峨大念佛に兎月橋が落ち、七八十人ばかり河中に落ちたといひ、永祿十年七月粟田口の風流は一乗寺の念佛踊と共に頗る盛大であつた。

或は又永祿十年二月十日の如き「六齋之念佛、大施餓鬼有之、十六七ヶ所之衆、先刻念佛申之次各一度又念佛有之、鉦鼓之衆二千八百人、貴賤男女之群集七八萬人、中略、先代未聞之群集也。」といふに至つては、たゞへ誇張的言辭さはいへ、其の盛大さが窺はれやう。中でも參詣の利益によつて無量の福德を得、世間の富貴を生ずるに信ぜられたる鞍馬毘沙門天の如き信仰は甚だ盛で、蔭涼軒日録には應仁文明より長享延徳の交に亘り、寅日鞍馬參詣のこゝを屢々見るこゝが出来ぬ。又東寺の大黒天が所謂弘法大師一刀三禮の彫刻であるといふので、その開扉に貴賤男女が福德を貰ひに競うて詣でたなき、偏に庶民擡頭の時勢相の然らしむるこゝろさはいへ、又以て近世に於ける所謂平民文化全盛の序幕を演ずるものといふことができやう。

註 ① 多聞院日記、信長公記等

② 師檀關係に就ては辻善之助博士「日本佛教史の研究」參照

③ 宗長手記

④ 言繼卿記

⑤ 鞍馬寺史

⑥ 蔭涼軒日録 延徳二年七月廿六日條

巡禮を表裏して伊勢參宮も盛に行はれた。中村直勝氏は「熊野那智山を一番し、美濃谷汲を三十三番とする巡禮が西國三十三所と言はれる理由も、坂東諸國から見ることから西國であり、熊野を一番とする理由は、先づ伊勢神宮に參詣して、そして三十三所靈場を巡禮し、それを終へて坂東へ歸るものゝために一から三十三までの順序が附けられたものであらう。」といつて二都の關係を述べてゐられる。一體神宮の信仰は鎌倉時代以後愈々盛くなり、重源參詣參宮記、東大寺衆徒參詣伊勢大神宮記、通海參詣記等は佛家の參宮記であり、室町殿伊勢參宮記、人鏡論等は公家武家の參宮記である。狂言素襖落は參宮を主題としたものである。さて當時に於ける國民の參宮を助長したものは御師の活動によることいふまでもない。御師は神宮のお守札を(後には曆)持つて各地の豪族に説いて施入を受け、特別な師檀關係の如きものを結んだ所謂高野聖の如きもので、後には御師職の家は宿坊を兼ねるやうになつた。かくて國民一般の神宮歸敬の機雲は愈々醸成された。武家法制の原典たる貞永式目の精神は戰國武將の間にも十分傳統され、敬神崇佛は頗る高揚された。而して内外宮の遷宮再興は皇室の尊嚴を神宮の神威を一層光輝あらしめた。

かくの如き時代の趣向に民意の趣く處を察し、神道史上一新紀元を劃したものはかの吉田神社の祠官吉田兼俱で、その著、惟一神道名法要集に於て、「神は天地の根元」、「神道は萬法の根本」であることを主張し、

日本生種子、震旦現枝葉、天竺開花實。故佛法者爲萬法之花實、儒教者爲萬法之枝葉、神道者爲萬法之根本。彼二教者皆是神道之分化也。

といつて、純一無雜の神道を宣布するを説いてゐる。彼による「三教を要すべからず」といひながら、更に弘く三教

の才學を存し、専ら我が神道の淵源を極むる者また妨げんや」といつてゐる。其の行事も神道灌頂、神道護摩といふ如き密教的色彩を帯ぶこと頗る多い。三教を巧みに調和せんとしたことは明かである。前述の思想を根葉花實説と言ひ、卜部神道ではこの思想を聖徳太子の説きして利用し、これを平安末期の卜部兼延の作としてゐるが、實は兼俱の偽作であることは、既に林道春の本朝神社考に中臣卜部の輩の假托するところを道破してゐる。

こにかく國民の自主的觀念の強調は古有文化尊重の精神となり、たゞへ儒佛の模倣はいへ、一個獨立の日本文化なるものを作り上げんと努力したのである。兼俱は夙に此の時代精神を把へたものといへやう。

註 岩波國史講座「室町時代の庶民生活」

四

上來、中世末期に於ける我國民の精神生活の一面を跡づけてきたのであるが、さて戰國武將の自國維持經營の第一義諦は何であつたか。それはいふまでもなく、富國強兵の充實である。時しも治國平天下の道、即ち府庫の充實、主従の道國家の統制を教ふる儒教―宋學―が國民の受容するところとなり、近世教學の基礎をなしたことに何の不思議もない。

薩摩の大儒山本秋水が「蓋倡程朱學於薩摩者自禪師始」^①といつてゐる如く宋學は應仁亂後歸朝して「不宗朱子之非學」を標榜した桂庵に到つて面目を一新した^②。その後南浦文之に續いて近世儒學の祖といはれる藤原惺窩及林羅山の如き碩儒出で、遂に幕府の政教を司るに至つた^③。その結果近世に於ける國民教化の基となり、文運の興隆、維新改革の萌芽を胎せしめ、社會の指導原理として一定の文化體系を成すに至つた。然もそれらの俊傑は佛門から儒に歸し、極力佛教を排斥してゐるものが多い。その唱へるところの經學は所謂古註ではなく、朱子の新註であり、その文學も彼の

白樂天等のものでなく、唐代排佛家として有名なる韓退之の文章である。されば自然反佛教的な方向に向ふことゝなつた。即ち彼等は「世のさまたげとなるものは出家の道なり」^④と排斥し、或は「大抵寺道場を建立するは國家に益なきのみならず、却つて人倫に害あれば廢るゝほぎ珍重」^⑤と極言してゐる。こゝに至つては全く排佛教的傾向を主張せるもので、儒者の口吻が察せられる。更に又貝原益軒をして學問の道を言はしむるならば「學問に有用の學あり、無用の學あり、わが儒の學は有用の學なり、有用の學は學問をすれば、わが人のため益となるをいふ」^⑦「この有用の學をするこゝこそ當代一般學者の考であつた。然もその本旨は「我儒の道は經濟の道にて世ををさめ、人をすくふ大道なり」^⑧といふ遠大なる抱負に對しては佛者も神道家も三舍を避けねばならない。かくてその學び得た知識は直ちに政治經濟其他萬般の道に應用され、それを誘導する力があるものゝ一般に信ぜられてきたから文化の指導精神ゝなつた。

この儒教風靡に刺戟されて興つたのが所謂國學である。その國學が國體觀念と結合するに及んで遽かに勢力をもつことゝなつた。然し儒教にしても、國學にしても、そのまゝでは我國民を指導することが出来ないで、無用の佛教と斥けながらもその長を採り、自らの短を補つて、國民を指導して行つたのである。排佛運動が必然的に起つてきたことはいへ、佛像なりして蠶末に取扱ふべからずといふ神道家の説が一方から勢を有してきた所以である。

こゝにかく、佛敎も儒敎も、全く日本の獨立をなしたといふべく、殊に中世より近世に亘る變遷多い時代に於て、國民敎化の基礎となり、精神生活を豊富にしたのである。

註 ① 島津國史

② 日本敎育史料卷十二

③ 漢學起源

- ④ 惺窩千代茂登草
- ⑤ 淺見綱齋白鹿洞書院揭示講義
- ⑥ 江戸時代の排佛論に就ては徳重淺吉氏「維新精神史研究」参照
- ⑦ 益軒十訓 大和俗訓
- ⑧ 益軒十訓 五常訓
- ⑨ 神道通國辨義